
玩具の城

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玩具の城

【Nコード】

N0839H

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

おもちゃの城の不思議な姫の話。

あるところに、おもちゃを積み上げて作った城に住む姫様がいた。

姫はおもちや遊びに夢中でここ数日何も食べていないので、食べ物を与えるため、しもべが遣わされた。

名をばジョンといいけり。

「姫様ジョンでございます」

姫は熊の縫いぐるみとの戦争ごっこに夢中だった。

「爆弾だ」

と言ってくるみを投げてきた。

「今、敵兵は退いております。今のうちにお食事を」

ジョンは姫に調子を合わせて言った。

「左様か」

姫はきれいに正座した。

しかし何か食べさせようとしても、食べ物という物の種類を忘れていたようだった。

しまいにはフォークで髪をとかし始めた。

「では姫様、私とおままごとしましょう」

「世が設定を決める。おぬしは頑固親父、世がその娘ひろ子、くまくまーまが娘が欲しい男な」

「どこでそんな事をおぼえたのですか」

「テレビで見た」

姫はにやりと笑った。

ちなみにくまくまーまとはさっきの熊の縫いぐるみである。

ジョンはここにいると自分も生身の人間ではなく一つの玩具である気がしてきた。

そしてままごとが始まる。

ままごとのつもりならきちんと食事ができるようだ。

「ひろ子を僕にください」

姫は裏声で言った。

「お前みたいな毛深い田舎モンにうちの娘がやれるかあ！」

「そこを何とか」

だんだん本当に熊が喋っている気がしてきた。

しかし気のせいだろう。

久しぶりのままごとは新鮮で楽しかった。

もしや人生のままごとのようなものかもしれない。

与えられた役割を演じる所は。

ジヨンはヒートアップしてちやぶ台をひっくり返したところ、壁にちやぶ台がぶち当たり、

城が崩れてゆくのだった。

しかし姫とジヨンは逃げることも出来ず、ただ見ているしかなかった。

たくさんのおもちゃの下敷きになったが、彼らは死ななかった。

なぜなら彼らはおもちゃになってしまったから。

その後玩具の城だったおもちゃの山は、赤字で苦しんでいたサンタさんが引きとって、子供たちに配ったそう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0839h/>

玩具の城

2010年10月9日19時31分発行